

京都大学	博士(文学)	氏名	母 利 司 朗
論文題目	俳諧史の曙		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文「俳諧史の曙」は、芭蕉や蕪村といった大山脈を有する豊かな近世俳諧史の出発点、その「曙」の実態を明らかにすることを目的とするものであり、以下に示す四部の構成から成り立っている。</p> <p>第Ⅰ部 序篇・第Ⅱ部 基盤篇・第Ⅲ部 各論篇・第Ⅳ部 資料篇</p> <p>第Ⅰ部は二編の論から構成され、近世俳諧史の曙、出発点を論じるための序に相当する。</p> <p>寛永六年に出版された往来物『初学文章抄』には、諸芸における月次の会の書簡雛形の中に、「月次の歌の会・連歌・俳諧」という一文が見えるが、諸芸流行の気運の中に、早くも俳諧の名が見えていたことは注目される。近世最初の俳諧発句帳『犬子集』(寛永十年刊)の出版は、その諸芸としての俳諧流行の延長線上に興ったものであり、発句帳の出版こそが、その後の近世俳諧史の土台となったものである(「第一章 俳諧史の曙」)。</p> <p>当時、俳諧は、和歌・連歌・俳諧という順序にランク付けされる諸芸の位置付けの底辺にあった。人々は、和歌や連歌を学びたい願望をもちつつ俳諧を学び出したのであり、俳諧を指南する宗匠たちも、実質的には連歌作法の指導や連歌の秘伝の伝授をもっぱらとしたのであろう。そして俳諧師としての独自性をことさらに謳わねばならなくなった時、かれらは、連歌にたいしての俳諧の言葉の自由自在さ、幅広さを説くかたちで、俳諧の「徳」を強調することとなったのである。当時の俳諧の中には、「下手の連歌師」や「下手の連歌」がおびただしく詠まれ揶揄されているが、俳諧を習い始めた人々が連歌への憧れを持ち、実際には連歌の作法を学んでいたからこそ、どちらつかずの「下手の連歌」が生まれたのであり、その対照に詠まれたのが、連歌にたいして言葉の自在性をもつ俳諧を称揚する句々なのであった。(「第二章 俳諧連歌考」)。</p> <p>第Ⅱ部は、七編の論から構成され、初期俳諧における俳諧理念や言葉、俳諧を取り巻く環境、といった俳諧の基盤にあたる問題を論じたものである。</p> <p>寛永から元禄頃にかけて流行した仮名書きの草子の中に、「うそ姫」「ふくろう」「玉虫姫」といった異類を主人公とするものがある。「うづほ・竹取の翁さびたる物語、伊勢・大和・源氏・狭衣はいふにたらず、鼠のよめ入、うそ姫の恋草まで、このため</p>			

しに引かぬはなし」(万治三年序『懐子』・任口跋文)といった俳論や俳諧作品の中には、それら異類物草子を意識し、踏まえたものが少なくない。『俳諧之註』(寛永一九年二月成)の作者正章は、俳諧の故事としての『源氏物語』の価値を認めつつ、俳諧が、「下手の連歌」に陥らないための独自性を強調する方法として、異類物の草子を踏まえた俳諧を高く評価した。「物にたとへば、連歌は能、俳諧は狂言たるべし」(寛永一八年跋『俳諧初学抄』)という俳諧論をいわば具体化させたのが、これら異類物草子を俳諧に読み込むことだったのである(「第一章 〈異類物〉俳諧の説」)。

初期の俳諧論においては、これら異類物草子は草双紙全体の象徴としてとらえられ、句に詠まれていたが、その中には「天にあふぎ地にふし」「さてもその後」「さるほどに」などといった常套句が数多く詠み込まれている。同じ本歌取りでも、和歌・謡曲・漢詩文などをもじる場合、一字一句の厳密さでもってそれが踏まえられるのにたいし、草双紙の本歌取においては、そのような具体的な典拠の指摘は意味をなさない。草双紙は、和歌・謡曲・漢詩文などと比べ、その本文は常に流動的であったが、「さてもその後」風の常套句は、可変的な性格をもつ草双紙のなかにあって動かない言葉の集まりであり、草双紙の雰囲気や端局的にあらわしうる言葉であった。草双紙はまた荒唐無稽な内容であると目されることが多く、その常套句はそのまま低俗的・荒唐無稽な雰囲気や端局的に生じさせるものであった。草双紙のもつ言葉の世界は、雅俗の問題にきわどく関わっていた言葉の世界なのであった(「第二章 〈草双紙〉と俳諧」)。

当時流行の「鳥刺し舞」「大黒舞」などの歌謡に代表されるいわゆる「見さい」の歌謡を踏まえた多くの俳諧も、歌謡という流動性著しいジャンルの中での不変的な「見さい」という言葉に注目し、それを本歌取りしたものであった(「第三章 〈見さい〉の歌謡と俳諧」)。

初期俳諧の中には、周知のことわざを本歌取りした例も数多く見られる。しかし、先に見た草双紙や歌謡の場合と異なり、ことわざの本歌取りは、ことわざ本来の比喩的意味合いを媒とする形で詠まれた点が大きく異なっていた(「第四章 〈ことわざ〉と俳諧」)。

近世前期の俳諧は、まさしく言葉の沃野であり、近世文芸研究の様々なジャンルにわたっての有益な資料を見いだすことができる。「第五章 〈板木に植ゆる〉考」では、「板木に植ゆる」という古活字版から製版への移行期における生の出版用語を考察し、「第六章 俳諧と『二十四孝』」では、当時大流行した『二十四孝』という草子への眼差しを明らかにした。また「第七章 むかし恋しや」では、記述のきわめて稀な六条三筋町のイメージに関わる俳諧を分析した。

第Ⅲ部は、八編の論から構成され、近世前期俳諧における人と書籍について考察したものである。

第一章と二章は安原貞室という俳諧師について論じたもの。松永貞徳の跡目を自称

した安原貞室には、「喧嘩早い策謀家」という評価がある一方で、芭蕉が『鹿島詣』や『奥の細道』においてその風雅への傾倒ぶりを慕ったほどの風狂の人という対照的な評価がある。芭蕉の貞室評の背景については様々な論がある。『師走の月夜』『かたこと』などによれば、貞室には、数寄を「折をたがへず」実行にうつすという、強い信念があったことがうかがえ、類火によって吉田山の智福院に仮住まいをしていた折の「閑居」をことさらに謳う一連の俳諧発句はその端的な例であろう(『玉海集追加』)。智福院は、当時人々が強く関心をもっていた兼好法師の庵の跡とされ(『京童』)、貞室はその地に住まうことになった時、「折をたがへず」兼好に成りきったのであった(「第一章 貞室と芭蕉」)。

その貞室が、明暦四年正月、有力門弟である桑名の伊藤孫右衛門良利に送った未紹介の書簡がある。俳壇の権威であった松永貞徳が没した後、俳壇は明暦二年に群雄割拠の点者乱立の時期を迎える。本書簡は、いち早く貞徳跡目を自称喧伝した貞室が、次々に分派していく俳壇情勢を苦々しく眺めている状態を詳細に映し出したものとしてきわめて興味深い資料である(「第二章 俳諧師と旦那」)。

第三章は、儒者と俳諧の関わりを、尾張藩儒ともなった小出永庵という人を例に考察したものである。天理図書館に所蔵される熱田の小出永庵と橋本每延に関わる膨大な俳諧書留によれば、小出・橋本両一族をあげての祈祷連歌の伝統の上に、寛永年間の熱田奉納俳諧万句があり、その中から正保年間の熱狂的な俳諧愛好が生まれたことがわかるが、永庵の俳諧愛好は慶安年間から突然確認できなくなる。新出資料によれば、慶安年間以後も、永庵は連歌活動を続けており、俳諧だけを遠ざけたことがわかる。この頃永庵は、『莊子翼註』『性理大全』などの和刻本の著作を世に問い、次第に儒者として認められだしたらしく、明暦三年には尾張藩に藩儒として召し抱えられることとなる。この儒者としての出世が、永庵における俳諧離れの原因の一つと考えられ、当時の儒者における俳諧への態度を考える手がかりにできよう(「第三章 儒者と俳諧」)。

第四章は、初期俳諧史上特筆される重頼と宗因について論じる。重頼は、貞徳からの離反を経て、独自の門流、独自の俳風を形成し、後の宗因風俳諧の基を作ったと評価される俳諧師である。彼は、宗因が新風の象徴的存在と目された延宝年間においても交流を続けているが、新風はかならずしも重頼の俳風とはあいいれず、なにゆえ宗因との交わりが続きえたのかが明らかでなかった。そこで『武蔵野』におさめられる宗因の作品を新風の特徴が表れやすい付句に絞って分析したところ、それらの大半が古い撰集からの再録であり、しかもそれらは重頼と宗因の一座する二種の懐紙に基づく付句であることが判明した。それらは重頼が好んだ「本歌取り」による句々であり、新風の手法である「無心所着」的な手法は排除されていた。重頼にとっての宗因は、「守武流」の継承者としての宗因ではなく、自らの好む俳風の理念の中におさまるかつての宗因像なのであった(「第四章 晩年の重頼と宗因」)。

第五章から七章までは俳諧の秘伝書について論じる。貞門の最も重要な秘伝書に、松永貞徳の著した『天水抄』（寛永十八年跋）という作品がある。しかし依るべきテキストはどれなのか、どのような意図で書かれたのか、といった根本的な問題さえ検討されること少なく今日に至っている。そこで大部分の伝本について本文を検討したところ、従来一本しかなかった異本が他にもう三本あること、さらにその異本こそが本来の本文を正確に伝えていることが明らかになった。これら異本は、流布本に比べ、その書写年代がきわめて古い。その中で最も注目すべきが京都大学大学院文学研究科図書室蔵『東方雨談』である。本書の寛文三年梅盛元識語には、貞徳没後、昌易の元にあった秘伝書の「正本」（『東方雨談』）を梅盛が書写したいと願い出たところ、貞室が横槍を入れてきたという情勢が生々しく記されている。流布本は貞徳から令徳に伝授された系統の伝本であり、令徳が様々な秘伝を独自に増補し改変していく過程で本来の形を失ってしまったものである。『天水抄』は、貞徳から離れた重頼・立圃などの撰集が世に迎えられていく情勢を苦々しく思う貞徳が、かれらを「新儀」「自見」などの言葉で徹底的に批判し、俳諧という習い事における「師伝」「相伝」の重要性を説いたものなのであった（「第五章 正本『天水抄』考」）。

西鶴にも秘伝を伝える作品がある。宗因一周忌追善百韻を出版した『精進膾』（天和二年刊）がそれである。本百韻は、近世初期に成立した秘伝「俳諧本式」に則って詠まれた百韻であるが、その巻末には「俳諧本式目」が付載されている。俳諧の本式目は、多く貞徳から西武へという道筋で伝えられたものであり、『白玉椀』（元文三年刊）には、西武から伝授を受けた才麿が西鶴に伝授したむねが記されている。俳諧本式についての言及は、元禄三・四年頃から顕著となるが、貞門の俳諧師たちは、西鶴の『精進膾』の刊行を秘伝の公開と認識していた形跡がない。その理由の一つはそれが単なるテキストとみなされたからであろうが、より大きな理由は、それが貞徳から西武に伝授された俳諧本式ではなく、「宗祇の口決抄」と称する物に見える連歌本式（『猿蓑物語』）と酷似する内容にすぎなかったからではなかろうか（「第六章 西鶴の秘説」）。

『俳諧当世男』『俳諧玉手箱』などの撰集をもつ蝶々子にも、秘伝書の編纂があった。『俳諧明鑑』（松宇文庫蔵）という四冊の写本（葛飾蕉門の間に伝えられていたものを天保頃に書写したものは、一部を除き、ほとんどが寛文から延宝・天和頃に成った貞徳流の秘伝書であり、ほとんど改変を受けずに当初の姿を保ちながら書写されていたものである。その中の様々な伝書の元奥書には、清原長須という書写者の名が記されているが、この人物こそ、清原夏野から繋がる尾張津島の名家平野氏の出である神田貞宣（蝶々子）その人であると判明した。秘伝書の多くは西武からの伝書であり、従来「談林風」に転じたと評される延宝年間の同じ時期に、蝶々子は、貞徳直系の秘伝書を次々に伝授されていたのである。秘伝書の中には、蝶々子自身が加えた内容も少なくないが、そこには宗因を賞賛する一方、宗因を勝手に我が方に引きつける「猿若宗匠」への痛烈な批判が見える。彼の本音は純然たる貞徳流の古風俳諧師として生

きることにあったのではないか。（「第七章 蝶々子跡追」）。

第八章「元禄初年の美濃前句付」は、元禄二年ころの美濃・尾張で行われた前句付資料を紹介し、『貞徳永代記』で近江前句付の流行が語られる直前の美濃の様相を確認した。

第IV部は、四編の資料を翻刻によってはじめて紹介し、近世前期俳諧の研究の便に供したものである。「第一章 橋本每縁一座連歌書留」は、第III部第三章「儒者と俳諧」に関わる連歌資料。「第二章 昌穂『西行谷法楽千句自注』」は、従来名古屋大学附属図書館皇學館文庫に千句の本文のみ記す伝本があったのにたいして、全句にわたって昌穂自身が詳細な自注をくわえた伝本の翻刻である。付合手法や発想を作者自身の自注によって正確に辿ることができるという利点をもっており、連歌と俳諧の関係を考察する上できわめて有益な資料となる。「第三章 承応二年雛屋立圃筆俳諧四季発句巻」、「第四章 雛屋立圃判隼士常辰宇治俳諧行巻」は、立圃関係の未紹介資料の翻刻である。

(論文審査の結果の要旨)

江戸時代の俳諧の歴史は、元禄期の芭蕉とその門下によるいわゆる蕉風俳諧と、百年の後にその蕉風に復帰することを目指した蕪村らの天明中興俳諧と、前後二つの高い嶺からなるものとして捉えられるのが常である。芭蕉も蕪村も、ことにその発句の孤高、高雅の詩情がとりわけ近代人の文学観には高く評価された。近来の俳諧研究の努力のほとんどが彼らの発句にむけて傾注されたと言っても、それほど過言ではないであろう。それに反して、それらに先立つ初期俳諧は、ともすれば「言語遊戯」の「微温的な滑稽」にすぎないものとして軽視されて、顧みられることが少なかった。

しかし、俳諧とは何か、和歌や連歌とはどこが異なるかという俳諧の本質を考えようとする際、和歌や連歌に次ぐ新たな文芸として俳諧が生まれ、人々に支持されるようになった時期、すなわち近世前期のいわゆる貞門俳諧の分析こそが重要であることは疑いない。和歌や連歌に対してなお高い敬意がはらわれていた時代、俳諧のどのような点に人々は魅力を感じて、それを好み詠むようになったのか。本論文は、当時の人々の立場にたって、彼らの俳諧に対する思い入れのほどを忖度しようとする。俳諧史の曙の時代に目をこらすことによって、俳諧の俳諧たるゆえんを明らかにしようとする研究である。未開拓の野にあえて鋤を入れようとする意欲的な試みと評すべきであろう。

本論文の本領は、第一部の序説に続く第二部諸論にある。その第一章「〈異類物〉俳諧の説」は、「うそ姫」「ふくろう」「玉虫姫」などの〈異類物〉草子の主人公を詠み込む数多くの初期俳諧を、驚くべき博搜によって列挙する。「うそ姫はつゝくりとして琴ぞ引く」(『新続独吟集』)の類である。伊勢・大和・源氏・狭衣という王朝文学を踏まえる表現の多い和歌・連歌の雅に対して、その王朝文学の世界を〈異類〉を主人公と見立てることによって俗に転化し、滑稽化した草子を取り込み、利用することによって、俳諧は新たな笑いの世界を創り上げたのである。「連歌は能、俳諧は狂言」(『俳諧初学抄』)という論者のあげる当時の俳諧論は、この具体例によって、ことに鮮明に理解されるであろう。

また第二部第二章「〈草双紙〉と俳諧」は、初期俳諧に「天にあふぎ地にふし」「さてもその後」「さるほどに」などといった草双紙中の常套句が数多く詠み込まれていることを指摘する。表現が固定的である王朝物語や和歌に対して、草双紙などは本文そのものが流動的であり、本歌取りの難しいものであるが、それらの句は草双紙中に繰り返されて、その俗なる雰囲気醸し出すものであった。たとえば「天にあふぎ地にふし待の月夜かな」(『空礫』)のように、それらの草双紙の常套句を句中に取り込むことによって、初期俳諧はほのかな滑稽味を獲得していたのである。論者は、それに類する句を実に豊富に引用して、俳諧に心ひかれた当時の人々が、そのような表現の自由さ、猥雑さ、滑稽さを俳諧の中に求めていたことを論じるのである。第三章「〈見さい〉の歌謡と俳諧」も、当時はやりの歌謡の常套句が俳諧に取り入れられたさまを多

くの挙例によって示すものである。近世初期文学のあらゆる分野に目配りした考察としてそれぞれ敬服にあたいする業績であった。

ついで第Ⅲ部の八篇の論文はいわば各論であり、前期俳諧の人と書籍にかかわる考察である。貞徳門下の安原貞室の伝記研究、尾張藩儒者の俳諧活動の考察、あるいは俳論書、西鶴の秘説までをうがう多彩な論攷が並べられているが、それらのほとんどが論者自身が見出し、入手した資料に基づいて行われていることには驚かざるを得ない。第Ⅳ部はその資料の翻字、および周到な解題から成る。

以上、初期俳諧の特色をさまざまに描き出した本論文は、従来の俳諧研究の欠を補うものとしてきわめて独創的な価値をもつものである。あえて言えば、本論の本領とした第二部には、俳諧を俳諧たらしめる要素として、漢語の使用、漢詩文の受容に触れる論がさらにあってよかった。第六章「俳諧と『二十四孝』」に一部それが果たされているとも言えるが、俳言としての漢語について、論者のさらなる教示を得たいものと思う。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十四年一月十六日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。